

部局史の編纂で学んだこと

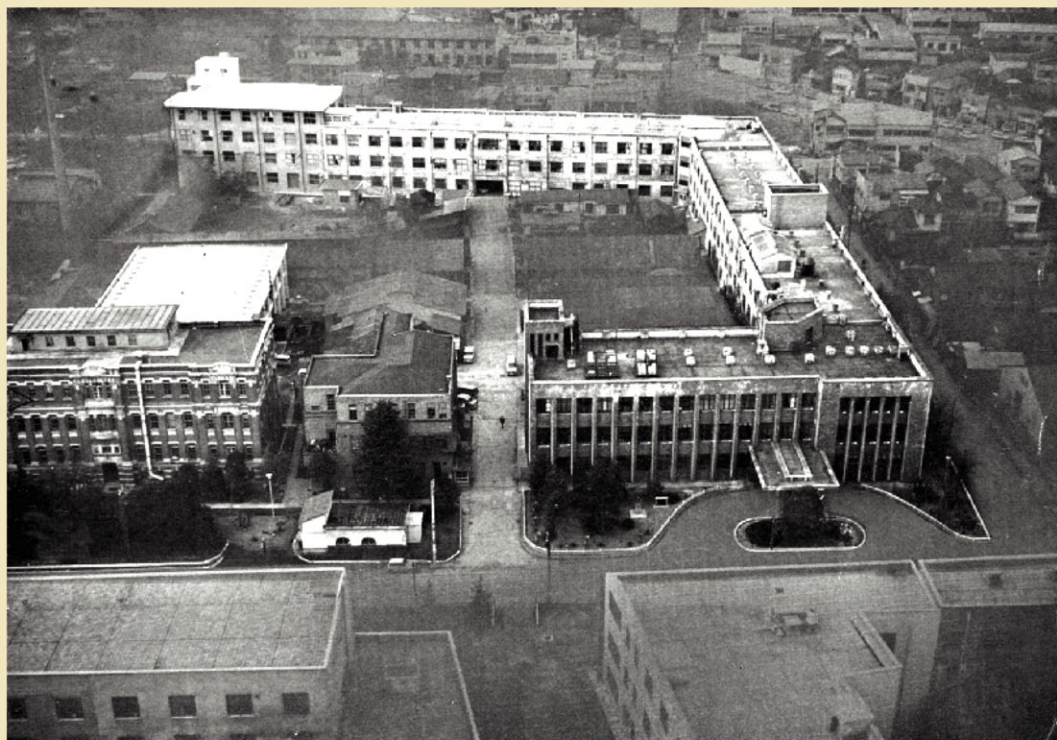
東北大学名誉教授・部局史編纂室 庄野安彦

金研

先達との出逢い

きんけん
ものがたり

物語



創立50周年(1966)頃の金研キャンパス。
手前左から、旧1号館/鉄鋼研究所(住友家 1921)、旧2号棟低温棟(齊藤報恩会 1929)、本多記念館(本多教授在職25年記念会 1941)とそれに
接続して北に、さらに西に延びる旧3号館/工業化研究棟(1957-63)。括弧内は寄付元および竣工年。

部局史編纂室では、2年後の創立百周年に向けて本学の記念事業の一環として企画された東北大学百年史の出版が進行中です。本所の分はその『第七巻部局史四』に収録されることになっており、来年3月に刊行の予定です。小生はたまたまその編集に携わることとなり、金属材料研究所89年の歴史を勉強する機会を得ましたが、その過程で多くのことを学んだと改めて感じています。ここではその一端を記してみたいと思います。

■ ■ 創立者本多光太郎の ■ ■ ■ ■ 発想と先見性 ■ ■

いまさら言うまでもないことですが、創立者本多光太郎の発想と先見性に改めて驚かされました。量子力学の黎明期であった大正5年に、理学部物理学教室に基礎を置きながら、実用に直結する鉄鋼の研究を目的とした独自の研究所を設立して、いわゆる物理冶金学なる学際領域を開拓しました。世界的に見てもこの時期の金属物理、後の固体物理の研究所は、ドイツ、イギリスなど数えるほどしかありません。また、このことによって、金研の最大の特徴のひとつである理工共存の伝統が築かれたと見るすることができます。

さらに戦前の早い時期に、低温・強磁場といった先駆的な極限分野を導入したことも、そ

の先見性が見られます。この伝統は、戦後の経済発展期における工業化研究部の充実、原子力関連部門の増設、化合物材料部門への進出、さらにはアモルファス金属材料の開発、共同利用研究所への改組などに活かされてきました。

■ ■ 優秀な人材による ■ ■ ■ ■ ナショナルセンター ■ ■

研究所の設立が民間資金の導入によってなされたことも全く新しい試みでした。創立50周年を迎えた頃の金研キャンパスの写真に見られるほとんどの建物は、民間からの寄付によって建設されています。しかし同時に、産業界に対する技術指導や講習会の開催、「金属の研究」に代表される啓蒙活動など、数多くの見返りに努力していたことを忘れてはなりません。

また、創立に当たっては、有望な人材を全国規模で集め、本多スクールを形成して黄金期を築きました。これは戦後も引き継がれ、ちょうど電子論と転位論に基礎を置いた金属物理学の発展期に、本所はナショナルセンターの役割を果たしました。

この時期に在籍したスタッフをみますと、どの部門もまことに錚々たる顔ぶれで、壮観としか言いようがありません。しかも戦後民主主義の流れに呼応して、部門の枠を超えた自然発生的な協力関係が豊かな実りをもたら

しました。人材の供給源として重要な役割を果たしたことは、戦前にも本学金属工学科や名古屋帝大の創設の際にもありましたが、昭和30年代に相次いで設立された原研・物性研・金材研には助教授クラスを中心に十数名が転出していることにもよく現われています。

■ ■ 自由な雰囲気 ■ ■ ■ ■ の研究風土 ■ ■

原稿の準備段階で貴重な助言と叱正を賜った多くの先輩の先生方は、金研の良い点として自由な雰囲気での研究ができたことを異口同音に挙げられています。このことは本所の構成が学閥にとらわれることなく、また民間企業の研究者も積極的に受け入れるなど、多彩な人材を登用してきたことと無関係ではないと思います。いわば、雑種の強みを生かした懐の深さです。もちろん創業以来90年に及ぶ長い時間の中で対立・抗争が全くなかったわけではありませんが、それを止揚して前向きな運営を心がけてきたと感じました。

本多スクールないしは金研創設自体が科学史の研究対象となっている今、本多光太郎を神格化した時代は過ぎ去ったにしても、その精神は失いたくないものです。